

---

# 博物館と学校の連携推進のために

To promote cooperation between museums and schools

福田 泰典<sup>※</sup>  
FUKUDA Yasunori

---

## abstract

The existence of the museum is so attractive. If we go there, we will find new and interesting things.

With the revision of the Course of Study in 2017, the idea of promoting cooperation between museums and schools has become clearer than ever regarding the utilization of museums and other facilities. However, considering the current state of its utilization, the ability of teachers to utilize museums and schools (Museum Literacy) is still insufficient.

In this paper, I will consider the challenges of building desirable relationships between museums and schools, and consider promoting cooperation. In addition, I will also consider how the museum's "accumulation of knowledge and museum materials" must be effectively utilized in school education.

## キーワード

博学連携・教育課程・ミュージアムリテラシー・教員・学芸員・共有

## 1 はじめに

博物館という言葉の響きに、子どもたちは一種独特の期待感を抱く。そこに行けば新しいものとの出会いがあり、そしてまた行ってみたいという思いを強く植え付ける。しかし、子どもたちが博物館に足を運ぶ機会を考えると、遠足、修学旅行、または夏休み中に開催される子ども向けの特別展示会等の観覧がその大半を占める。

このように考えると、博物館を利用するきっかけは、内発的に起きるといってもその大半は、どちらかといえば外発的な動機付けによって引き起こされる場合が多い。実際に自分の課題を調べるために、自ら博物館を訪れた児童となると極めて少ない。実際に目的をもって博物館を繰り返し訪れている児童もまた然りである。

平成 29 年の学習指導要領の改訂により、これまでの博物館等の利活用については、これまでよりもさらに双方の連携を推進する考え方が明確になった。しかし、その具現化のためには、知と物の蓄積を博物館側がどのように提供し、学校側がその蓄積をいかに享受するのかという思案すべき過程がある。また、逆を言えば学校が博物館等の施設を明確な目的と方法を整理した上で利用しなければその蓄積を本当の意味で享受することはできない。博物館として何を提供し、学校から何を得るのか。また、学校は博物館から何を得て、そしてその享受から何を博物館に提示できるのか。双方の考えがより深まるためにはどうあるべきか、博物館と学校教育の現状を見つめ、そ

※宮崎市立瓜生野小学校

の望ましい関りについて考えてみたい。

## 2 教育課程編成段階での課題

すべての学校には各校が編成する教育課程が例外なく存在する。そしてそれは、児童生徒の心身の発達段階を的確に踏まえ、学校行事や各教科等の授業などを総合的に勘案し各学校の創意と総意に基づき編成された学校のオリジナルティーにあふれた教育計画でなければならない。そしてこの教育課程の実施を円滑かつ確実に進めるためには、カリキュラム・マネジメントの考え方が大切である。そしてこのカリキュラム・マネジメントの推進にあたって、文科省が示す3つの側面の一つに、『教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせることが強く求められている。』という一文がある。この文中の「教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて…（以下省略）」は、新しい学習指導要領が唱える「社会に開かれた教育課程」という考え方を色濃く反映したものであり、博物館も例外なくこの資源に含まれる。

学習指導要領の中では、これまでの改訂でも博物館や美術館の活用についてそれなりの必要性を明記してきた。しかし、改訂を重ねる度にこの文言がより鮮明に強調される背景には、博学連携が叫ばれて久しい今、それが思うようには進んでいないことへの憂慮がその理由としてあると考える。実際、学校で博物館を利用するにあたって、教育課程に基づく年間計画の中に見学先として位置付けられてはいても、児童の学習、探求活動が、学習課題を解決するための手段として明確に位置付けられ、そこに行くことによって現状の課題が解決し、フェーズがさらに進んだより深い課題の発見へとつながるような活動は少ないと感じる。むしろ、見学に行くことで教科書の中で見たものを再確認したり、初めて見聞するものに感動したりするに終始し、楽しさや驚きが優越する時間として終わってしまうということが多いのではないかと考える。

## 3 博物館利用の現状

教育課程における児童生徒のための教育活動には、必ず意味付けが伴わなければならない。そこには学校教育というものをとおして形づくっていきたい児童生徒の姿を思い描きながらの活動が展開される。したがって、博物館の利用にも当然ながらその目的が存在し、そして博物館の側にもその目的に呼応する対応が求められる。

児童の興味の赴くままにそれぞれのペースで見学させることで、そこから学びの対象を選定し課題を考えさせる活動もあるだろう。しかしそうであっても、事前に見学をする目的を児童生徒と確認し、最大限の効果を生む時間とするには訪問先の職員との連絡調整を綿密に行うことは必要不可欠である。

その際、博物館を利用する教員の経験値もここでは大きな差異を生む一つの要因となる。博物館に勤務していた頃に、到着時刻、滞在が可能な時間帯、学年等を告げ、そのほかには特に要望がない、というかあとは博物館側に依頼するといったケースも多々あった。もちろん、館内での見学についてのマナー等、いわゆる公共の場での道徳的などころはしっかり教えてくださるのが常だが、あとは児童生徒の自由意志に任せてしまうというケースも少なからずあった。前述のとおり、博物館の利用をとおし

て児童生徒に何を学ばせたいのかが明確でなければ、本当にただの物見遊山で終わってしまい、それ以上の深まりを期待できない。

それでは見学という活動のみで終わってしまう一過性の学習に偏重しがちになるのなぜなのか。その理由として、学びのための資料や場を求める側の学校、とりわけ博物館の利活用を模索すべき教員の大半が、博物館と協働で教育活動を実践、もしくはそういった実践事例を見聞した経験を有しないという点が指摘できる。また、学校との連携をいかように図っていくべきかを思案する材料を得るため、学校の現状を恒常的に探ろうとする意識が博物館側になければ、これもまた利活用の促進及びその時間が充実したものになるか否かに少なからず影響があると考えられる。

#### 4 双方向の思いを叶えるために

現行学習指導要領の総則の中に「地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。」の一文がある。また、すべての教科ではないが博物館や美術館などの教育機関との連携についての記述が散見される。しかし、これらの文言が実際の現場で教育課程を編成する段階でいかに意識されているかは大きな疑問である。いわゆる「連携」という言葉で置き換えられる博物館と学校の間で展開される教育活動がどれほど実施されているのかを考えると極めて低調といえるであろう。遠足等での見学に組み込まれた博物館の利用以外に、年間をとおして学習活動の中に博物館の利用が位置付けられている学校は少ないのが現状である。

博物館としても館を利用してもらうことは大切であるが、より充実した博物館の利用の在り方を模索する際には、博物館と学校をつなぐコーディネーター的な役割を果たす人材の存在が博物館と学校の双方に必要になってくる。

##### (1) 博物館に求めるもの

博物館を直接的に利用することだけが連携ではない。博物館が取り扱う分野は多種多様である。当然一つ分野に特化した展示を実施する館もあるが、総合的に扱えば扱うほど、そこには多様な史資料が存在し、それを取り巻く様々な人が存在する。それにより史資料を大量に収蔵展示することが可能となるが、利用する側にとって直接利用できない情報が、各分野のエキスパートとして存在する学芸員が蓄積してきた人的資源である。この極めて有用な資源を利用者（学習者）といかにして結びつけることができるかを考え、具現化することが、「知のコーディネーター」である学芸員の大切な作業である。調べたいこと、知りたいことがより鮮明になった時、博物館の展示資料は一見してその概要を教えてはくれるが、それは一方的な情報の収集に過ぎず、利用者が欲するものすべてを伝えるものではない。より深く知りたいと思えば、そこから派生的に見えてくる史資料へとつながる扉を自ら開く必要がある。そのための術を伝え、児童生徒、教員に知識を超えた本当の意味での学ぶ意欲、探求心の深まりを促すことが膨大な資料と情報を動かせる学芸員としての使命でもある。学芸員には専門分野を追い求めるのと同じ速度で、その成果として培ってきた知識や技術を礎に、博物館が有する史資料と人的資源という知の扉を開く術をより分かりやすく求める側に伝えていく使命があると考えられる。

## (2) 学校に求めるもの

「博物館をあまり利用しない教員や児童生徒が多い」という表現を見聞することがある。単なる興味の問題なのか、それとも交通等の物理的手段の障害があるのか。それはどうあれ、利用しないという表現は正しくは「利用の仕方が分からない」と換言すべき場合もあると思う。単刀直入に言ってしまうと、学校が博物館にもっと学びへの協力を求め、要求すべき点を考えているかということである。教材研究や授業の中で浮上した課題解決のために博物館の利活用が頭に浮かんでも、学校がまず考えることはそこに行くまでの交通手段、所要時間、必要経費などが先立ってしまう。それは博物館に自分たちが移動して学ぶことを前提として考え、その授業時間等の捻出に工夫を要するからである。しかし実際には、多様な学びの形態があり、必ずしも自分たちがその場へと赴かなければならないわけではない。2019年度末の学校一斉休業はオンライン形式での授業の普及を後押し、児童生徒にタブレット端末を一人一台担当することが当たり前の時代がやってきた。その産物として、オンラインで学芸員とやり取りをしながら学習を深める授業を実施した事例も数多く存在する。今後、ハンズ・オン展示などの体験的な展示技法とも融合させながら、オンライン形式での授業支援やAR（拡張現実）を利用した体験活動など、博物館との連携は、学びの選択肢として確実に増えていくであろう。そして、そのような中において学習者である児童生徒の発達段階に合わせ、学習効果を最大に引き出す手立てを模索する主体は、目の前の児童生徒に日々向き合う教員である。そのためにも博物館の利用に慣れ、カリキュラム・マネジメントを理解した教員の養成が急務であるが、ここで言う「理解した教員」という表現は、短絡的に教育課程を編成する能力を有する教員という意味ではない。また、教育課程とカリキュラム・マネジメントが不可分な関係にあるのは当然であるが、その編成等に必要の関係法令等をよく理解した教員という意味でもない。今、学校の中に求められているのは、児童生徒の探求心を引き出し、博物館等の教育施設をいかに教育活動に組み入れていくかを内外の協力を得ながら試行し続けることをいとわなない人材である。

ミュージアムリテラシーの必要性を語る時、以前はどちらかといえば利用する側の知識や理解能力に偏重していたが、昨今では学校と博物館の双方に必要なミュージアムリテラシーの必要性が求められている。学校と博物館がそれぞれ何を与えることができ、何を与えることができないか。何を求め、それにどのように応えるか。学校と博物館相互の考えがうまく融合し、児童生徒の学びのために補完すべきことを共有するに至れば、必ずや次のフェーズへの一步を踏み出すことができるはずである。

## 5 ミュージアムリテラシーの向上につながる取組事例

学校現場に身を置く者として、児童生徒に教える立場の教員が博物館や美術館などの教育機関をよく知ることが大前提であることは疑いの余地はない。しかし一方で、それらの利活用の在り方を考えるためには、そういった施設の利活用について学ぶ機会を意図的に創出することも必要である。地域の資源としての博物館や美術館等の存在をより身近なものとして活用するためにはどのようなプロセスや予備知識が必要なのか。児童生徒のために博物館等を活用して何ができるのか。利活用を推し進めるためには教員のミュージアムリテラシーが多少なりとも必要となるが、学校だけでその

向上を図るプログラムを考案することに無理がある。このような視点に立ち、県内の実践事例に目をやるとそういった側面をサポートする際に参考となるいくつかの事例がある。

#### (1) 教員のリテラシー向上に特化したプログラム

##### 教員のための博物館の日 in 宮崎（宮崎科学技術館、写真1）

平成20年に国立科学博物館が始めたこの事業は、同館の資料によると令和3年度の開催館が全国で40館を数える。本県では宮崎県総合博物館（以下「総合博」と）と科学技術館が平成25年からこの取組に参加。現在は科学技術館が継続して開催しているが、今年度は感染症拡大防止のために中止となった。

科学技術館から御提供いただいた資料を概観すると、館の施設紹介、開発プログラムや利用の手引きの解説に加え、教員自身が科学を楽しみ、授業でそれを児童生徒に伝えるためスキル等が盛り込まれている。館の有効活用のヒントと学校教育が館との連携で得られる学習効果の可能性を伝えることに努める姿勢が感じられ、教員のミュージアムリテラシー向上に資する取組となっている。

同じような取組として、西都原考古博物館が教員のための講座「授業に活かせる考古学」を平成21年度から実施している。同館は「教員のための博物館の日」を主催したことはないが、科学技術館に職員を派遣して協力館として参加している。

過去を遡れば総合博が平成20年以前に館オリジナルの「教員のための博物館講座」を実施していた時期もある。そういった意味では博学連携の必要性を認識し、そのモデルとなる取組に早い段階で着手したことは評価されるべきことである。



写真1：教員のための博物館 in 宮崎（提供：宮崎科学技術館）

国指定史跡生目古墳群の隣接地に、平成21年度に開館した生目の杜遊古館は市の文化財課により展示活動、歴史講座、体験講座を開館以来続けてきた。令和2年度からは指定管理者による運営に移行し、文化財課もそれを機に独自の講座を開講した。その講座の一つが教育者支援特別講座である。ここでいう「教育者」とは学校教育、社会教育に携わる教員等を意味し、主に学校の授業で市の史跡や歴史的事象をどのように取り扱うか、端的に言えば教材化への視点を伝え、ともに考える講座である。

講座は歴史的事象に基づき設定したテーマの基礎的知識の教示から始まるが、それが教科書等に取り上げられている周知の事象とどのようにリンクしているのかを参加者とともに考えながら展開していく。その中では資料の活用の仕方から、児童生徒に課題意識を芽生えさせ、その意識を探求活動へとつなげる手立てについて意見交換をする場を設けるなどの工夫がある。また、必要な資料にたどり着くためのプロセスやヒント等についても可能な限り丁寧に解説し、身近に存在する多くの素材を精査すれば児童生徒の学びに役立つものが関連素材も含めて多々あることに気付かせていく。本講座は、参加者が受講後に授業等の実践にどのように結び付けるまでを見届ける段階は設定されていないが、資料の発掘と活用、そして参加者相互の学びからその輪を広げることにより、身近な歴史的事象を教材として活用する術を得る講座であると言える。博物館の利用等の意義を知らせる内容も当然ながら含まれている。

このほかにも都城市教育委員会文化財課では、小学校6年生のための歴史副読本として「都城の歴史と人物」を刊行している。教員向けの手引きも作成しているが、そのほかにも文化財課が主体となりその活用についての研修等も実施し、受講者から出された現場からの意見を改訂作業に生かしていこうとする動き（流れ）がある。指導者用の手引きには、地区で採択された児童が使用する教科書の頁と自分たちが暮らす都城市の歴史との関連を明示した構成となっている。同書には図版等が豊富に使用し、身近な史資料を丁寧に取り扱っており、興味関心を抱いた児童や教員を博物館や資料



写真2：教育者支援特別講座（提供：宮崎市教育委員会）

館、史跡等に誘う役目も果たしている。

## (2) アウトリーチ事業の活用

### どこでも博物館（宮崎県総合博物館、写真3）

---

平成27年度から宮崎県総合博物館が実施している事業である。館が所在する宮崎市から遠く離れた地域を優先開催地として選定し、収蔵資料の展示に加えて、展示解説や体験講座等を実施する事業である。収蔵資料を眠らせるのではなく、積極的に外で活用し、博物館側から学習者へ働きかける点に大きな意義付けができる。

児童生徒だけでなく、地域の住民への公開にも積極的であり、博物館の活動を広く外へと発信する効果は高い。特に学校単位での利用にあっては、その学校がある地域の素材にも目を向けさせ、それを教材化へとつなげる視点等について教員にレクチャーする機会にもなっている。教員が地域素材の魅力に気づき、それをどのように構成すれば児童生徒に提示する教材にまで昇華できるのかを学ぶとともに、開催後の博物館とのつながりも生まれる有用な機会を提供する場になっている。

## 6 おわりに

コロナ禍の中、今年度は学校から外へ出て学習する機会が少しずつ増え、博物館を見学する機会にも恵まれた。引率した児童が様々な展示物に目を輝かせ、解説員の話に熱心に聞き聞き入る姿は、博物館がもつ魅力とその奥深さを改めて感じさせる一瞬でもある。そして、そういった子どもたちの姿を見るにつけ、博物館と学校の連携は、児童生徒のより深い学びへとつながることを確信する。

今この時にあって、学校が博物館を効果的に利活用しやすくし、児童生徒の学びをより深めていくためには、学校の裁量である程度まで自由にアレンジが可能なシステムティックな利活用のスタイルを急ぎ考案することが必要であると考え。また、すでにこういったベースとなるスタイルが博物館側で考案されているとすれば、積極的



写真3:どこでも博物館（会場:島野浦小学校 提供:宮崎県総合博物館）

にその存在を学校側に知らしめる努力も必要であろう。また、学校にあっては教育課程にその目的に基づく活動を明確に盛り込むために、その編成段階から博物館との関りをもつことが大切であるし、博物館としても児童生徒と教員が一過性でなく、恒常的に博物館との関りを保つことができるプログラムを考案することも必要である。博物館と学校の双方の意識が本当の意味での連携というレベルにまでなかなか達しない理由は、こういった連携を図る上での端緒を見い出せない点によるところが大きい。博物館と学校が年間をとおして博物館を利用した学びの必要性を認識し、児童生徒の学びの過程をともに考案した先行事例等を参考にしながら、啓発と推進に取り組む必要もあると考える。

そしてもう一つが、学校から博物館に児童生徒の学びのために希望や意見を的確に提示する機会を創出することである。これは双方にとって不可欠な作業である。博物館等協議会などで外部の意見を聞く機会は確保され、学校教育の立場から意見を述べる委員も選出されている。しかし、学校と博物館の連携のより具体的な方向性を探るとすれば、学校で日々指導に携わる教員の生の声を聞く場を設定することも必要であろう。まずは館が所在する近隣地域からでもよい、アドバザーとなる館内外の博物館や自治体職員の協力を仰ぎ、同じ空間での意見交換が大切である。

博物館を利用した学びがもつ可能性を強く意識し、学習者の反応を確かめながら試行錯誤できるのは教員であり、その可能性を学校現場で児童生徒とともに具現化し、成果として実感できるのもまた教員である。今、こうした意識の啓発を促すために、学校と博物館の双方が真剣に考え、学びの場に積極的に取り入れていく機会を創出していかなければならない時期にきている。

本稿の作成にあたり、次の各氏にご助言、ご協力をいただいた。末尾ながらお名前を記して謝意を表す次第である（50音順、敬称略）。

井田篤（宮崎市教育委員会） 鎌田頼彦（宮崎市教育委員会） 栗山葉子（都城市教育委員会） 後藤清隆（宮崎県立西都原考古博物館） 平松憲太郎（宮崎県総合博物館） 福島由太郎（宮崎科学技術館） 福松東一（宮崎県総合博物館） 梶木郁郎（宮崎県立西都原考古博物館）

#### 参考文献

小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄 2005『博物館教育論 新しい博物館教育を描きだす』ぎょうせい  
小川義和・五月女賢司 2021『発信する博物館 持続可能な社会に向けて』ジダイ社  
都城市郷土歴史読本編集委員会編 2008『都城の歴史と人物』都城市教育委員会